

「時」を超越された岡先生へ

加地 貴美子

拝啓

先生が余りにもはやばやとエリュシオンの園へと移られて、時は無情に過ぎていきます。この世では、寒気を催させる事件が続出、20世紀も去ってゆくという感慨が致します。

エリュシオンの園の住み心地は如何ですか。勿論、「不死なる方々」の御住居ですから、快適には違いないでしょうが、論争の相手などは居るのでしょうか。先生が書き遺された論文を拝読致しますと、「学問は不死なり」と改めて実感されます。「西洋古典論集」第16集の巻頭の「『オイディプス王』のἐνとπρόςに関する一考察」では、先生の息吹がそのまま甦って来るようです。あの論文を、著者名を秘して、「何歳位の人が書いたか推量する」ゲームをしたら、少壮気鋭の古典学者が、同年代の学者と論争しているとしか思えないでしょう。ギリシア語と日本語双方の語感に十分注意を払いながら、原作者のメッセージに迫ろうとする気魄が生き生きと伝わってきます。「ἐνとπρόςが相互に置き換え可能か」という初歩的な意味論的操作において、代表的な用例を、各用例の文脈に十分注意しつつ丁寧に検討され、「置き換え不可能」という結論を導出された論理構成は実に緻密で隙がありません。従って、この結論は、私達皆が共有できる財産になります。更に、細部に関するこうした精確な読み方は、初学者が遭遇するさまざまな素朴な疑問、教師や先輩に尋ねても、「そのような初歩的な事など検討に値しない」と一笑に付されてしまうような細部の疑問をも大切にして、言語観察をつみ重ねてゆくことは十分意義あることだと教え、励まして下さるものです。

実際には、藤澤先生から批判を受けるずっと以前から既に、先生は、あの前置詞の意味用法の区別に関して問題意識を持ち続けておられたのではないのでしょうか。だからこそ代表的な用例に注意を払っておられ、そうした注意深い言語観察の蓄積が、藤澤先生からの批判を契機に、一挙に結晶したように思われます。

このような「思考の喜び」——これこそ人間に固有の恵みでしょう——による「生の息吹」を永遠に感じさせてくれる文章を遺された方こそは「不死なる

存在」の仲間入りをされる資格が十分おありです。博覧強記の人は数多いでしょうが、テキストを読み解くという基本的な作業を通して、思考をフル回転させながら、古人の魂に直接触れようとする気魄を伝えることのできる方は稀です。あの「オイディプス王」に関して、主人公の不安が、やがて怖るべき真実に直面せねばならない恐怖へと刻々と変化してゆく心理的過程を一見些少な語句の用法の変化の裡に読み取ることが、同時に「運命」という圧倒的な力の前に無力な人間存在という、基本的な古代人の人間観に直接触れることになります。こうした人間の根元的な弱さへの認識は、現代の超加速度的に変化してゆく社会の中で、先行き不透明な時代を手探りで歩む我々の状況とも類比せられるものです。

先生のテキストへの誠実さは、学生への対処に於いても現れていました。大学院入試の際に提出した私の稚拙な文章も丁寧に訂正されたのは、魯迅の不朽の短篇「藤野先生」——若い留学生魯迅が、自分の医学の講義筆記を教授たる藤野先生が丁寧に朱筆添削したのを見た時の感動と感謝を描いた名作——を思い出させます。

先生からはもっと学んでおくべきだったと悔やまれてなりません。私は、パソコンを駆使した「研究」などとは無縁な人間です。それでも、古代の人々同様、こつこつと自分なりの遅々たる歩みにおいて、先生が御手本を示して下さった古典とのつきあい方、そして人間とのつきあい方を大切にしていきたいと思えます。

先生が手塩にかけてお育てになられた京大西洋古典学科及び、西洋古典学の裾野を今後もずっとエリュシオンの園より守り、導いて下さい。